様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月　８日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19500206
研究課題名（和文）　公立図書館における児童サービスの意義及び理念の総合的研究

研究課題名（英文）　Comprehensive study of principles and values of children's services in public libraries

研究代表者
汐崎　順子（SHIOZAKI JUNKO）
慶應義塾大学・文学部・講師
研究者番号：50449021

研究成果の概要（和文）：戦後の日本における公立図書館の児童サービスの動きと，関連する諸要素の動きの調査・研究等から，1)児童サービスの発展には人的要素の影響が大きかったこと，公立図書館全体の流れと異なる独自の動きがあったことを明らかにした。2)児童図書館員の教育体制，職の機会について米国との相違を明らかにした。3)公立図書館の利用が,子ども時代の読書の外的要因となることを実証的に示した。4)児童書の出版と文庫の動き,および両者と児童サービスとの関係を検証した。

研究成果の概要（英文）：Through the studies of the history of children's services in Japanese public libraries and related movements since the end of World War II, the following results were found, 1) the influence of human elements on children's services, and the different trend from the main stream of the history of public libraries in Japan, 2) the difference between U.S.A. and Japan as for the education and career paths of children’s librarians,3) the experience of using public libraries became one of the external factors for the reading in early childhood, and 4) the history of publishing children’s books and BUNKO in Japan, and their relationship to children’s services.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,300,000 円	390,000 円	1,690,000 円
2008 年度	900,000 円	270,000 円	1,170,000 円
2009 年度	700,000 円	210,000 円	910,000 円
年度			
年度			
総　計	2,900,000 円	870,000 円	3,770,000 円

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：情報学・情報図書館学・人文社会情報学
キーワード：図書館学，児童図書館，公共図書館，児童サービス，児童図書館員，

１．研究開始当初の背景

現在公立図書館において児童サービスは重要な柱の一つとして定着している。日本でも公立図書館の児童サービスは児童室設置率，サービス実施率等の統計から明確に示されるように，図書館サービスの一部門として

定着しているといえる。
　近年は，子どもの読書に取り組む社会的な意義と課題がより強く意識され，国をあげて読書環境の整備と充実に取り組む時代になった。その中で公立図書館の児童サービスは，地域の子どもの読書を支える使命を持つ。しかしその一方で行政改革の進行に伴い，「官から民へ」の委託化が急激に進み，公立図書館そのものの存在価値が問われている。
　この状況下，公立図書館における児童サービスはその専門性と存在意義，子どもの読書への自らの位置づけを再確認し，取り組まなければならない時期にきているといえる。
　わが国では長年に亘って子どもの読書環境を整え，豊かな読書の機会を提供するための様々な取り組みが行われてきた。子どもを取り巻く文化的・社会的環境が大きな変化を遂げた今，なぜ子どもにとって読書が大切なのか，どのように社会が，公立図書館の児童サービスが子どもの読書環境の整備と充実に取り組んでいくべきかを問い直す必要がある。この過程を経て初めて今後の公立図書館の位置づけと役割も明確にされよう。
　しかし，児童サービスを検証するために全体像を捉えようとしても，戦後の児童サービスの動きを体系的にまとめた研究，児童サービスの理念や児童図書員の専門性等について経年で検討した研究は存在しなかった。
　このため研究代表者は，2005 年に公立図書館における児童サービスの発展の歴史を，文献にあらわれた言説の分析，統計資料の収集と分析，児童サービス関係者に対する聞き取り調査によって，体系的に提示する作業を行った（研究成果として，汐﨑順子，創元社，児童サービスの歴史：戦後日本の公立図書館における児童サービスの発展，2007，213p. を出版した）。

２．研究の目的

　本研究では，研究代表者の先行研究をさらに発展させ，子どもと子どもの読書に関する社会の状況が大きく変化している現在における公立図書館の児童サービスの理念や理論の見直しを行う。
　児童サービスを単独の事象としてではなく，日本の社会において子どもの読書環境の充実と整備を担う重要な一要素として立体的に捉え，戦後の公立図書館における児童サービスの意義，役割と位置づけを検証し，確認すること，それに基づいて今後の児童サービスの新しい枠組みを検討することを目的とする。

３．研究の方法

　研究の目的を達成するために，以下の視点と方法で調査と検証を行った。

(1) 戦後の児童サービス発展史の調査と検証
　戦後の児童サービスの歴史，全体像を明らかにするために，児童サービスを中心とする視点から戦後の公立図書館史を検証した。特に今までの研究から影響力の大きさが示された人的要素，インフォーマルなネットワークをより明確に示すため，文献調査に加えて，聞き取り調査による情報収集も重視した。

(2) 児童サービスの影響，効果の調査と検証
　公立図書館の児童サービスの影響力，効果を把握し，検証するために，公立図書館の児童サービスを受けた経験が，その後の読書や公立図書館利用にどのような影響を与えているかを調査した。具体的には，公立図書館の運営が安定していた 1990 年代の中ごろまでに児童期を過ごした集団に対して，フォーカス・グループ・インタビューを実施し，当時の公立図書館の児童サービスの利用，これまでの読書経験，現在の読書状況等を調査し，その結果の分析を行った。

(3) 欧米の児童サービス，児童図書館員教育の現状の調査と検証
　欧米の公立図書館における児童サービスの状況とその理念は，日本の公立図書館の児童サービスに大きな影響を与えてきた。欧米において，児童図書館員の専門性確立の基盤となっているのは，大学院レベルでの図書館・情報学の教育体制であり，日本の現状とは大きな格差がある。各国の公立図書館における児童サービスおよび児童図書館員の教育体制の現状を文献調査と聞き取り調査（訪問調査），Web 調査によって明らかにし，日本との相違点を検証した。

(4) 子どもの読書に関する戦後の動きの調査と検証，児童サービスとの関連性の考察
　ここでは，より広い視点で児童サービスを捉えることを目指した。すなわち社会における児童サービス，子どもの読書環境の整備と充実に関わる大きな流れの中での児童サービスの意義と役割を確認して位置づけること，今後の方向性を見出すことを目的とし，子どもの読書に対する様々な動きと公立図書館，児童サービスとの関連性を調査，検証した。具体的には，戦後の児童書出版に関する調査，地域における子どものための私的な読書施設であり，日本独自の動きといわれる文庫に関する調査を行い，それぞれの結果を児童サービスの視点から検証した。

(5) 公立図書館における児童サービスの意義および役割の検討
　研究の総括として，公立図書館における児童サービスの現状，その意義と役割，将来に向けてあるべき姿の枠組みを検証した。併せ

て今後継続して発展的に取り組むべき課題とその方向性を検討した。

４．研究成果

(1) 戦後の公立図書館における児童サービスの発展およびその要因

① 小河内芳子の研究・調査からの児童サービス発展史の検証

戦前から戦後にかけ，公立図書館の児童図書館員として児童サービスに携わった小河内芳子(1908 -2010）を“児童サービスのパイオニア”と位置づけ，その経歴と活動を明らかにした。併せて小河内が活動した各時代における児童サービス，児童図書館員の動きを示した。ここでは小河内芳子の経歴を時代別に 4 区分し，各時代における関連文献を調査収集し,検証した。併せて関係者への聞き取り調査を実施した。

調査と検証の結果，小河内は児童図書館員として幸運な経歴を持ち，その立場を活かした活動により，戦後の児童サービスの動きに様々な影響を与えたことが分かった。その業績のうち評価すべきものは，1)組織的な活動とネットワークの形成, および 2)児童図書館員の専門性の確立および資質の向上である。1970 年代には, 量を重視して公立図書館の発展をめざす動きの中，質の充実をめざす活動に対する批判が生まれたが，これは児童サービスに取り組む視点の違いによるものであることが考察された。

この研究の成果は 2008 年に学術論文として発表した。また小河内が約 30 年間会長を務めた児童図書館研究会の活動史との関連からその活動と業績を検証し，会の機関誌『子どもの図書館』で発表した。

② 児童サービスの視点からの公立図書館の発展期の検証

児童サービスの動きを 1963 年から 1970 年を中心に検証し，日本の公立図書館の発展期における児童サービスの位置づけ，役割を明らかにした。これは，戦後の児童サービスの動きの解明，今後の方向性の検証と提示に資する重要な要素である。

この研究では 1960 年代から 1970 年代にかけて発表・出版され，この時期の公立図書館の運営と発展の核となった『中小都市における公共図書館の運営』(1963)，『市民の図書館』(1970)，『図書館政策の課題と対策』(1970) と，東京都日野市立図書館の活動(1965～)に焦点をあてて文献調査を行い，児童サービス関係の内容を抽出して検証した。併せて児童サービス関係者への聞き取り調査を実施した。

調査と検証の結果，公立図書館の発展期には，貸出を伸ばすことに重点をおいた様々な取り組みが行われる中，児童書の貸出数の多さが，児童サービスに対する認識と位置づけの変化につながり，児童サービスは図書館発展の重要な鍵ととらえられるようになったことを明らかにした。併せて当時の関係者の児童サービスに重点をおいた積極的な活動への迅速な方針の転換が，住民の要求，当時の社会の流れに呼応し，公立図書館の発展と普及への大きな力となったことを示した。

この研究の成果は 2009 年に学術論文として発表した。

(2) 児童サービスの影響と効果

子ども時代の読書経験，公立図書館で児童サービスを受けた経験および家庭における読書環境などが，その後の読書や公立図書館の利用に与える影響を明らかにした。併せて読書の出発点および発展期とされる子ども時代を中心に，読書に関する各自の行動，姿勢および意識の共通点や相違点を分析し，読書意欲と読書習慣の形成過程の特徴的なパターンを見出した。

ここでは，個々人の事例を継続的かつ詳細に追うため，質的調査であるフォーカス・グループ・インタビューを採用した（1980 年代生まれの男女 23 人を対象に 4 回実施）。

発言記録を分析した結果，一般的に「読書を促す」あるいは「読書から遠ざける」と思われている各要素が，予想とは異なる効果に結びつく事例を見出した。また多くの参加者に兄弟姉妹との読書への嗜好の相違が見られた。これらにより，各要素が実際に各自の読書意欲や読書習慣の形成に結びつくか否かは，その要素を受け止める個々人の内的要素に大きく左右されることが明らかとなった。併せて読書意欲と読書習慣が，それぞれの各発達段階に存在する外的要素とその捉え方により，異なる型に形成される様子を，特徴的であった 4 人の事例で示した。

公立図書館の児童サービスは「読書を促す」外的な要因にあたり，参加者それぞれの公立図書館利用の様子，その後の利用および読書についての影響力の関係を検証した。

この研究の成果は「読書意欲・読書習慣の形成過程：子ども時代の読書を中心に」としてまとめ，2008 年 9 月に三田図書館・情報学会で発表した。

(3) 欧米の児童サービス，児童図書館員教育の現状

児童図書館員に求められる知識と技術，職の機会とキャリアパスを調査・検証し，日本の実態を明らかにすることを研究の視点とした。このため，現在の米国における公立図書館の児童サービスの現状，教育体制およびキャリアパス，児童図書館員の専門性と地位

についての調査を行い，日本の現状との比較を行った。

まず ALA（アメリカ図書館協会）の認定を受けた大学における児童図書館員養成の教育体制，さらに児童図書館員に対する求職と就職情報の現状について，Web 調査および文献調査により情報を収集した。併せてニューヨークおよびシカゴ公共図書館の児童図書館員等に対して聞き取り調査を行った。

調査の結果，ALA 認定校の大半で児童図書館員養成関連の科目が複数設置され，必要な知識と技術を習得するための教育体制が整っていること，米国社会では児童図書館員は専門職として認知され，職の機会が提供されていることが明らかとなった。聞き取り調査では，現場の児童図書館員が「スペシャリストになる」という明確な意志と目標をもって学び，その専門性を活かす職の選択が可能であったこと，児童図書館員としての昇進の機会が存在することを確認した。

この研究の成果を「米国における児童図書館員の養成とキャリアパス」としてまとめ，2007 年 11 月に三田図書館・情報学会で発表し，職の継続と向上の意欲を支える道筋としてキャリアパスの具体例も紹介した。

本研究では，日本における児童図書館員の教育，図書館員としての職の機会およびキャリアアップの道筋の提案への示唆を得た。

併せて海外の児童サービスの現状と動向を広く知らせることを目的として，児童図書館研究会の機関誌『子どもの図書館』に調査を行った公立図書館の事例を掲載した。

各国の公立図書館，児童サービスの現状と日本のそれとの比較および提案は継続課題である。伝統的なサービス，新しいサービス，またナショナルセンター的な機能を持つ児童図書館の内外に対する使命と役割，国際的なビジョンから児童サービスの取り組みを提示することを今後の課題とする。

(4) 子どもの読書に関する戦後の動きの調査と検証，児童サービスとの関連性の考察

① 戦後の児童書出版と児童サービス

児童サービスに影響を与え，その発展を支える基本的，重要な要素である児童書の出版状況の戦後の変化を主として国立国会図書館の所蔵データの分析から明らかにした。併せて出版物を網羅的に収集する国立国会図書館の児童書部門（国立国会図書館国際子ども図書館）の役割を確認した。

まず，国会図書館の NDL-OPAC より出版年が 1945 年-2008 年の児童書（和図書）のデータをダウンロードして得た 171,767 件を分析の対象とした。ここから 1)1.700 件を無作為抽)出し，NDC を基本に絵本と漫画を加えた分類，翻訳作品を区分するコード等を付与して内容を検証した。さらに 2）出版年が 1955，1965，1975，1985，1995 年のデータを各年 100 件ずつ無作為抽出した。一般書に関しては同年，同数のデータを NDL-OPAC から無作為抽出し，オンライン書店でこれら（合計 1,000 件）の現在の入手可能性を調べた。

1)の結果，戦後の児童書出版は読み物が主流であり，児童文学と絵本の翻訳比率が高く，特に 1965-75 年に積極的な翻訳の動きがあったことが明らかとなった。2)の調査では，入手可能な児童書 77 点，一般書 49 点と，一般書よりも児童書のロングセラー性が高く，その傾向は出版後 30 年以上のものに顕著だった。出版全体では上位 20 社の出版点数が 53.6%と出版社の寡占が見られたが，入手可能なロングセラーの児童書の出版社は分散していた。

この研究の成果を「戦後日本における児童出版の特徴：国立国会図書館所蔵児童書データの分析を中心に」としてまとめ，2009 年 9 月に三田図書館・情報学会で発表した。

戦後の児童書出版の動きは，公立図書館における児童図書の選択と収集の検証に欠かせない要素である。戦後の各時代における児童サービスと出版界の動きについて，より詳細な検証が必要である。これと併せ，網羅的に国内の出版物を収集する国立国会図書館の役割，児童書専門のナショナルセンターとしての国立国会図書館国際子ども図書館の役割を検証し，明らかにしていくことも重要と考える。

② 戦後の文庫の活動と児童サービス

日本には，公立図書館とは別に日本独自の私的な読書施設として文庫が存在する。母親を中心とする大人が自主的に地域の子どもたちに読書の場を提供する文庫は，1960 年代後半から 1980 年代にかけて，公立図書館のサービスが貧しかった地域で，その補完的な役割を果たす場所にもなり，その数も飛躍的に増加した。正式な制度のもとに成立するものではない文庫の正確な数および実態を把握することは困難であるが，1980 年 12 月現在，全国で 4,406 の文庫が活動をしていたという報告がある。

日本の公立図書館，児童サービスを考える上で，この文庫の存在と活動は欠かすことができない。その調査は，各地域における子どもの読書への直接的な働きかけ，児童サービスの発展の背景を明らかにする重要な要素である。

本研究では事例調査として 1971 年に設立し，今も存続している横浜市の汐見台文庫（地域文庫）の現在までの活動を明らかにし，戦後の文庫の活動の一側面を示した。汐見台文庫の取り組みと成果，主宰者の変化，各時代における社会的背景などを明らかにする

ために，地域的な資料を中心とする文献調査，関係者への聞き取り調査を実施した。

調査の結果，文庫設立の背景には市図書館からの積極的な普及活動があり，当初の主宰者の信念と力が活動を拡げたこと，併せて地域文庫という組織的な運営により，地域社会に定着したことが明らかとなった。

さらに汐見台文庫の一連の活動の調査と検証から，文庫の主宰者を中心に拡がった図書館設置の住民運動の原因および背景を明らかにした。この個としての動きが全国の文庫と図書館との関係に一般化できるかを検証する必要がある。また，現在の各地域における公立図書館と文庫各々の役割，協働と協力のあり方に関する示唆を得た。

この研究の成果を「文庫の活動とその変化：横浜市汐見台文庫の事例調査」としてまとめ，2009 年 10 月に日本図書館情報学会で発表した。

研究では，文庫と児童サービスの現在の関係を明らかにすることが，今の児童サービスの方向性を見出す重要な鍵になることが示唆された。公的・私的それぞれの立場からの子どもの読書への働きかけ，両者の協力・協働がより強く求められる時代になったためである。そこで，この汐見台文庫の主宰者以外の文庫関係者等への聞き取り調査，各地域の文庫をつなぐ文庫連絡会の活動についての質問紙調査も実施した。併せて文庫連絡会をつなぐ全国的な組織である親子読書・地域文庫全国連絡会の活動にも注目し，児童サービスとの関係性を解明するための聞き取り調査も実施した。今後は個々の文庫に対する全国的な質問紙調査等を実施し，各地の児童サービスと文庫との関係，役割を明らかにした上で，双方の協働の方向性を解明していく。

③ 文庫，児童図書館の発展と石井桃子

児童文学者であり，東京子ども図書館の創設者である石井桃子（1907-2008）の業績を公立図書館の児童サービスとの関りに焦点を絞った視点から調査してまとめた。

石井桃子の『子どもの図書館』(岩波書店，1965）は，1960 年代後半以降の文庫の飛躍的な発展に大きな影響を与えたと言及されている。実際，当時は多くの文庫主宰者が，本の小見出しでもある「ポストの数ほど図書館を」を合言葉に，各地で図書館設置の住民運動に活動を拡げた。しかし，石井の真意は文庫活動の振興ではなく，公立図書館における児童サービスの発展であった。

ここでは石井が書いた文献を中心にその業績を経年で追い，活動の内容を示して,児童サービス,公立図書館に対する石井の姿勢と取り組みを明らかにした (2010 年に児童図書館研究会より刊行)。

(5) 公立図書館における児童サービスの枠組みの検討

本研究では児童サービスは公立図書館の一部門として機能すると同時に，独自の役割と位置づけがあること，社会の期待が存在することを明らかにした。児童サービスの動きには，公立図書館全体の流れとは異なるものがあり，子どもの読書と関連する社会の諸要素と相互に強い影響を与え合っていた。

児童サービスは，戦後公立図書館の発展とともに普及し，日本社会において認知されるようになったが，今もなお,果たすべき使命と役割を十分に発揮しているとは言い難い。社会における児童サービスの認識と価値観を高め，利用者側，図書館側双方が公立図書館の提供する児童サービスの内容と質に対して現状よりも，より高い水準と目標を設定すべきである，という根拠を明確に提示していく必要がある。

本研究では具体的に欧米の児童サービスとの比較から日本の教育体制の弱さ，職の環境の貧しさを指摘し，知識と技術の習得,それを発揮すべき職の機会を提案する必要性を明らかにした。

現在の読書推進運動の大きな動きの中での公立図書館の児童サービス，および児童図書館員のあり方，子どもの読書に関係を持つ各地域の住民との協働のあり方等を検証し，より具体的に示すことを今後の継続的，発展的な課題とする。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① 汐﨑順子，世界の図書館：ニューヨーク，こどもの図書館，Vol.57，No.3，2010，ｐ.9.

② 汐﨑順子，世界の図書館：トロント，こどもの図書館，査読無，Vol.57，No.2，2010，ｐ.8-9.

③ 汐﨑順子，世界の図書館：ピッツバーグ，こどもの図書館，査読無，Vol.57，No.1，2010，ｐ.10.

④ 汐﨑順子，日本の公立図書館の発展期と児童サービス：1963 年から 1970 年を中心に，Library and Information Science，査読有，No.62，2009，ｐ.81-110.

⑤ 汐﨑順子，二つの道：小河内さんの歩み・児童図書館研究会の歩み⑦，こどもの図書館，査読無，Vol.56，No.1，2009，ｐ.9-10.

⑥ 汐﨑順子，小河内芳子：児童サービスのパイオニア，Library and Information Science，査読有，No.60，2008，ｐ.29-60.

⑦ 汐﨑順子，二つの道：小河内さんの歩み・児童図書館研究会の歩み⑥，こどもの図書館，査読無，Vol.56，No.12，2008，p.10-11.
⑧ 汐﨑順子，二つの道：小河内さんの歩み・児童図書館研究会の歩み⑤，こどもの図書館，査読無，Vol.55，No.11，2008，p.9-10.
⑨ 汐﨑順子，二つの道：小河内さんの歩み・児童図書館研究会の歩み④，こどもの図書館，査読無，Vol.55，No.10，2008，p.9-10.
⑩ 汐﨑順子，二つの道：小河内さんの歩み・児童図書館研究会の歩み③，こどもの図書館，査読無，Vol.55，No.9，2008，p.10-11.
⑪ 汐﨑順子，二つの道：小河内さんの歩み・児童図書館研究会の歩み②，こどもの図書館，査読無，Vol.55，No.8，2008，p.9-10.
⑫ 汐﨑順子，二つの道：小河内さんの歩み・児童図書館研究会の歩み①，こどもの図書館，査読無，Vol.55，No.7，2008，p.8.

〔学会発表〕（計４件）
① 汐﨑順子，文庫の活動とその変化：横浜市汐見台文庫の事例調査，日本図書館情報学会，2009年10月31日，明治大学駿河台キャンパス
② 汐﨑順子，戦後日本における児童出版の特徴：国立国会図書館所蔵児童書データの分析を中心に，三田図書館・情報学会，2009年9月26日，慶應義塾大学三田キャンパス
③ 汐﨑順子，読書意欲・読書習慣の形成過程：子ども時代の読書を中心に，三田図書館・情報学会，2008年9月27日，慶應義塾大学三田キャンパス
④ 汐﨑順子，米国における児童図書館員の養成とキャリアパス，三田図書館・情報学会，2007年11月10日，慶應義塾大学三田キャンパス

〔図書〕（計１件）
① 汐﨑順子，尾野三千代[共]編著，児童図書館研究会，「喜びの地下水」を求めて：石井桃子が児童図書館にのこしたもの，2010，72p.

６．研究組織
(1)研究代表者
汐﨑　順子（SHIOZAKI　JUNKO）
慶應義塾大学・文学部・講師
研究者番号：50449021

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし